



Title	追悼エッセイ
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 1999, 38, p. 200-256
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25410
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

—イギリス・ルネサンス詩研



『イギリス・ルネサンス詩研究』出版記念パーティにて

1996年11月4日撮影

藤井治彦先生小伝

玉 井 暲

藤井治彦先生は、1935年（昭和10年）8月24日、兵庫県西宮市仁川町（にがわちょう）にお生まれになった。父君は、高名な学匠詩人の、藻風竹友弋雄（とらお）先生（1891-1954）で、大阪大学文学部英文学講座の初代教授であられた。母君は芳とおっしゃる方（1900-94）で、先生はそのあいだに生まれた末っ子の四男である。長男の竹友安彦氏は、精神病理学者となられ、現在ニューヨークに住んでおられる。ご二男は中国で戦死され、ご三男は生後まもなく亡くなられたと伺っている。長女の和子様は、生化学者の高木氏と結婚され、今は福岡にお住まいである。先生が藤井の姓を名乗る理由については、よく尋ねられるのだが、それは、戦死された兄君が遺言に示された希望にそって、母方の姓を継がれたとのことである。

先生は、1934年（昭和9年）関西学院大学教授となって東京より移ってこられた父君が、仁川のほとりに新築された家で育った。この家は、戦前の阪神間の山の手文化を忍ばせる品のいい落ち着いた感じの家であった。現在は、建て替えられて、先生が設計された瀟洒な洋風の家がたっている。先生は、ご兄姉と歳が離れていたため、一人っ子のように慈しみ育てられた。小学校は兵庫師範学校附属（現在は神戸大学の附属小学校）で、御影の附属と呼ばれたエリート小学校であった。中学校は関西学院中学部に進まれた。この中学校は、英語を学ぶのに非常に恵まれた環境にあったようである。先生は、英語を学習し始めるときは、日本人が日本語で文法を教える授業と、英語を母国語とする外国人が英語だけで行なう授業とが平行して行われるのが理想的だという持論をもっておられたが、それは関学中学部での経験にもとづいていた。先生のご友人に、同中学の同級生で、同じ英文学の道に進まれ

た京都大学の喜志哲雄氏がおられるのも、この学校の優れた英語教育環境を物語っているのかもしれない。

高校は、豊中市にある大阪府立桜塚高校に行かれた。先生は、小・中学校とは違った雰囲気の世界へ冒険したかったのと、父君の勧めもあって、同校に入学されたが、マンモス校のもつ独特な圧倒感に戸惑われたようである。同級生に、詩人・小説家の富岡多恵子氏がおられた。氏の『青春絶望音頭』（角川文庫、1975）には、先生らしき人物がちょっとキザな高校生として戯画的に描かれている。荷風の『断腸亭日乗』に読み耽ったのもこの頃であった。

先生は、1954年（昭和29年）、大阪大学文学部に入学され、二年間の教養部時代を経て、英文科に進学された。進路を決めるにあたっては、西洋美術を研究する道を選ぼうか、あれこれ悩まれたようである。というのは、先生は、小さい頃より絵の実技を習っていて、絵には相当の自信をもっておられた。プロの画家を目指す勇氣はちょっともてないにしても、美術評論家か美術史学者になることを夢見られた。結局、外国語をしっかりとっておけば後は何でもやれると思い（父君のアドバイスもあった由）、英語と英文学を学ぶ道を選ぶこととなった。のちになって、「美術は深く愛しながら、結婚できぬ恋人のような存在になった」と述懐されておられるが、美術への愛着は終生もち続けておられた。それは、ご専門の英文学研究にも活かされているが、そのほかに、西洋美術、とくに英米の現代美術について多くのエッセイを残され、またモダンアートを収集する趣味をもっておられたことから窺える。

教養部時代の先生は、同人誌に小説を発表されるなど、いくらかゆったりと学生生活を楽しまれたようである。この中で、英語の柴田徹士先生との出会いは大きな意味をもつこととなる。英語を正確に読むことを徹底的に教わったのである。柴田先生との師弟関係は、以後ずっと長く続き、お二人の対談形式による英語教育論『英語再入門』（南雲堂、1985）はその美しい証して

あるが、ここに、師弟の英語教育観がみごとに波長を同じくして交差し合い、一つの輝かしい結晶を实らせている。

1956年（昭和31年）、先生は、学部の英文科に進学され、加藤猛夫教授の指導を受けることとなった。父君で、阪大英文学講座を創設された竹友席雄教授は、先生が阪大に入学された1954年（昭和29年）の10月、停年ご退官まであと数ヵ月を残して亡くなられていた（享年63歳）。

1958年（昭和33年）、同英文科を卒業され、同大学大学院修士課程に進まれた。翌年、加藤教授が停年退官され、村上至孝教授が着任された。先生は、ミルトンの初期の詩を論じた修士論文を書いて、1960年（昭和35年）同博士課程に進学された。先生の修士論文は極めて秀れたものであったので、高い評点が与えられたそうだが、たまたまその点を漏れ聞いて、自分でもびっくりしたとおっしゃっておられた。

1960年は、山川鴻三助教授が着任され、Earl Miner教授（UCLA）がフルブライト派遣講師としてスタッフに加わり（1年間）、翌1961年には英語学講座に毛利可信教授が着任されるなど、にわかに充実した英文科の中で、先生は着実に若手英文学者の俊秀としての道を歩んで行かれた。すでに博士課程2年生のとき、日本英文学会全国大会（於北海道大学）で『リシダス』について研究発表をされている。

1963年（昭和38年）、博士課程を単位修得退学されたあと、先生の身辺は急に慌ただしくなられた。4月、神戸女学院大学助手に着任されたが、同年10月、大阪大学教養部専任講師に転出された。1964年（昭和39年）4月に、矢部房子様と結婚された。そして、同年夏には、UCLAに留学されるためにアメリカに旅立たれた。この留学は先生にとって極めて実り豊かなものであった。それは、何よりもマイナー教授がUCLAにおられたことが大きかったが、Peter L. Thorslev, Jr., James E. Phillipsらの教授からも有益な影響を受けられた。

1965年（昭和40年）夏、帰国。秋より阪大教養部で英語の授業を再開

された。この中で、たとえば文学部1年生を対象にしたクラスにおいて、アメリカの大学学園生活を描いた Lionel Trilling, *Of This Time, Of That Place* (1943) を教材に用いて魅力的な授業を行うなど、学生たちに大きな刺激を与えられた。当時、教養部のカリキュラムには、一般英語のほかに、文学部学生を対象にした英文学入門的な科目「英語講読」があって、先生がそれを担当されると、非常に高い人気を得ておられた。たとえば、1966年、Palgrave, *Golden Treasury* を用いて、英詩講読の授業をされたことがある。

1967年(昭和42年)同助教授に昇任。1974年(昭和49年)、教養部改組に伴い言語文化部助教授となられる。1975年(昭和50年)10月、文学部英文学講座助教授に着任され、1981年(昭和56年)10月、同教授に昇任された。この教養部助教授時代から文学部助教授・教授時代を経て、Administrationの仕事で忙しくなられた50代半ばまでの20年あまりは、先生が全身全霊を傾けて研究と教育に没頭できた時代であつたろうと思われる。

先生の英文学研究の領域は広範囲にわたっているが、なかでも研究の中心はイギリス・ルネサンス詩にあつて、特にパストラルの研究においては、日本英文学界のなかで第一人者であられた。1972年、マイナー教授が日本の若手英米文学研究者の論文を集めて、*English Criticism in Japan* (University of Tokyo Press) を編集されたとき、先生は、Spenser, *The Shepheardes Calender* の時間感覚を論じた論文を寄稿された。1973年(昭和48年)、英文のパストラル論、*Time, Landscape and the Ideal Life: Studies in the Pastoral Poetry of Spenser and Milton* により、阪大より文学博士の学位を授与された。この論文は、翌年京都のあぼろん社から出版され、国内のみならず海外でも注目され、高い評価を受けた。その書評が、『英文学研究』(御輿員三)、*Spenser Newsletter* (Donald Cheney), *The Year's Work in English Studies* (C.A. Patrides ; John Roe), *English*

Studies (William C. Johnson), *The Review of English Studies* (John Buxton) などの学会誌に掲載された。

先生は、1982年（昭和57年）に『「樂園喪失」——思想としての空間』（研究社）、1996年（平成8年）に『イギリス・ルネサンス詩研究』（英宝社）を出版された。これらは、いずれもミルトン、スペンサーを中心に論じた高度に専門的な研究書でありながら、英文学の他の領域の研究者に対しても示唆に富む新鮮な刺激を与えうるものを数多く含んでいる。この特質もまた、先生の研究がもっている魅力のひとつである。ここには、個々の詩作品への鋭い分析もさることながら、詩の言葉、作品の構造、文学研究の方法、現代批評理論の功罪など、文学研究の根本に関わる問題への深い洞察が貫かれている。すでに、正統的な英文学者としてみずからの立場が確立しておりながらも、絶えず現代の新しい研究や批評の動向を視野に入れつつ、英文学研究の王道を極めることを怠らない先生の真摯な姿勢を窺うことができる。

先生の他の主要な業績には、以下のものがある。『ルネッサンスと反ルネッサンス——シンポジウム英米文学 I』（共著、学生社、1974）、『竹友藻風選集』全二巻（編著、南雲堂、1982）、『時と永遠——近代英詩における思想と形象』（共著、英宝社、1987）、『空間と英米文学』（編著、英宝社、1987）など。翻訳には、アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』（共訳、紀伊國屋書店、1964）、ロウズマリー・フリーマン『スペンサー』（研究社、1970）、ピーター・V・マンネリ『牧歌』（研究社、1973）、E. M. W. ティリヤード『英詩とその背景——一四七〇年より一八七〇年にわたる五つの詩を例として』（南雲堂、1975）などがある。

先生は、熱心で、かつ誠実な教育者であられた。その面は大学院の演習において存分に発揮された。Spenser, *Faerie Queene*, Milton, *Paradise Lost*, Shakespeare, *Sonnets* など、ルネサンス文学の重要な作品を、一語一語の意味を OED にあたって確かめながら綿密に読んでいかれた。学生たちは、この演習で、先生からテキストを正確に読む姿勢を身をもって教えられ、英

語読解力を鍛えられたのであった。

先生は、1991年（平成3年）4月、文学部評議員に選ばれたあたりから急に忙しくなられた。1993年（平成5年）5月までその任にあり、この間、総長補佐を兼任された。1994年（平成6年）4月、文学部長に選ばれ、文学部の大講座化を遂行し、大学院重点化への道を拓かれた。こうした中で、任期途中に重い病いに襲われ、部長職を降りざるを得なくなられたのは、まことに残念であった（1995年7月）。

1995年（平成7年）1月17日未明、阪神淡路大震災が起こった。この惨事の後頃から、先生は体の不調を感じ始められたようである。5月末に入院されて検査の結果、深刻な病気であることが判明した。胸腺癌であった。しかし化学療法と放射線療法が奇跡的に効いて、約4ヵ月の入院生活ののち、めでたく退院された。この後、先生は本当にお元気であられた。翌年1996年（平成8年）11月4日、近著『イギリス・ルネサンス詩研究』の出版をお祝いする会が一年遅れの還暦祝賀会を兼ねて開かれたときは、出席された友人の皆さんや多くの教え子に完全復調を強く印象づけられた。1997（平成9年）年5月27日、日本英文学会に招かれた Denis Donoghue 教授（ニューヨーク大学）の講演会が阪大文学部で開かれたとき、先生はみごとに司会役を務められた。ところが翌1998年（平成10年）春頃から、先生は手にしびれを感じ、噎（む）せることが多くなって、結局6月末に再入院された。三年前の病いの転移と診断された。

先生は、しかし入院中も将来への希望を失わず、授業を再開される日を待ち望んでおられた。そして、11月14日（土）、阪大英文学会において行われた、「阪大英文科の50年を振り返って：特に創設期をめぐって」と題する記念講演会には、車いすに乗られて出席して下さった。しかし結果的には、この日の先生が公の前に見せられた最後の姿となられた。転移がさらに進行し、呼吸不全にて急逝された。1998年（平成10年）12月5日未明のことであった。奇しくも父君と同じく、停年ご退官まであと数ヵ月を残して、享

年63歳であった。

先生の葬儀は、西宮市の関西学院教会にてしめやかに行われた（前夜式、12月6日；告別式、7日）。当日の凜とした寒さは、先生の葬儀にどこか似つかわしいものを思わせた。なお、先生は、亡くなられたあと、正四位、勲三等旭日中綬章に叙せられた。

先生のお骨は、兵庫県猪名川霊園にある関西学院教会の納骨堂に納められている。1999年（平成11年）4月11日（日）、先生の納骨式は、晴れわたった空のもと、散り始めた桜の花びらを浴びながら執り行われた。山の中腹に建つ納骨堂から下を見ると、長閑かな春の風景が横たわっていた。先生の御霊が安らかな眠りにつかれたと思わずにおれなかった。

先生の停年ご退官を記念して企画された『藤井治彦先生退官記念論文集』（英宝社、2000）には、先生ご自身が執筆された思い出の記“Remembrance of Things Past”と「著作目録」が収録されている。藤井先生を知るには、ともに興味深い著作である。

藤井先生を偲ぶ

石 田 久

あれからもう半年余りが過ぎた。思えば昨年夏休み前の講義が終わった日が研究室でお話した最後となった。刀根山病院から豊中市市民病院に転院され、気丈に闘病を続けられた。夏休み中病室で幾度もお話した。私にとっては、お見舞いというより、例年の夏休み通り、日を決めて研究室でおしゃべりを楽しむのを、場所を移しただけという感じであった。少なくとも、そう思い込みたかった。

容体は安定していたが、衰弱は徐々に進んでいた。Westfield 大の

Loughman 教授が、夫君と共に豊中までお見舞いに見えたとき、藤井先生はきちんとスーツとネクタイの姿で、病室から出てロビーで応対された。いささかの乱れもない格調の高い英語で謝意と病状の説明をなさっているのを聞きながら、さすがと思う一方で、普段の朗々とした声ではないこと、車椅子であることに、私は現状を認めざるをえなかった。

Loughman 教授ご夫妻にはかねてからメールをやりとりして連絡してあった上、前日にもご滞在中のホテルでの打ち合わせで詳しく藤井先生のご病状をお知らせしてあったものであるから、病院に近づくと、何か固唾をのんで、というご様子であった。しかし、実際に会って話された後、藤井先生の以前と変わらぬ丁重さと、毅然として現状と向かい合われる勇氣に強い感銘を受けられたようであった。

学部学生の時、「Metaphysical Poets」の講義中に私がした質問について、その講義担当の Hubbell 先生に一応の説明を頂いたのであるが、当時院生として同じ講義に出席しておられた藤井先生が、後で葉書でわざわざくわしく説明を補足してくださったのが、お付き合いの始まりとなった。小さな几帳面な字でぎっしりと詳しい解説が書き込まれていた。そこには藤井先生の親切さと、追求して止まぬ熱意があふれていた。尋ねっぱなし、聞きっぱなしののんきな後輩としては、これは驚嘆すべきできごとであった。

その後院演にご一緒するようになり、藤井先生の卓越した演習担当ぶりは目を見張るばかりであった。ただし、他の人の担当分についての訂正のご意見はいつも丁重で控え目であった。他の人の担当分についても、たいいていの場合には担当者本人よりも膨大なノートを準備され、ご自分の考えに確信をお持ちであったにもかかわらず、そうであった。担当教授へのお心配りもあったのであろうし、当事者への配慮もあったと思われる。尤も、控え目であってもそこには断固たる信念が伺えるのであった。他の問題に関しても、この姿勢はずっと変わらなかったと思う。

若き日の藤井先生は瘦身で眼光鋭く、孤高の俊才という風貌であった。と

ころが実は人懐っこく、にこやかで、話し好きで、先生方から先輩、さらに同輩、後輩に至るまで誠に幅広くお付き合いをされた。基本的に人間にたいする関心が非常に強く、またその情報量の多さにはいつも驚かされてきた。これは先生の周りの同時代の人間だけではなく、ミルトン、スペンサー、ワーズワースといった過去の詩人、さらに彼らの古今東西の研究者についても同じであった。ただし、その情報は雑然と量が多いだけではなく、分析と評価が行き届いており、そこからふと漏れてくるコメント、特に私が直接知っている人々に関するものは、いつ聞いても的確で、かつ面白いと思った。

退官したらローヴァーミニで野山に分け入りスケッチをしたい、と五年ほど前におっしゃっていた。先ず運転免許がいりますね、と言うと、いまからでは無理だろうかと真剣な顔付きで尋ねられた。健康が許せば、本当に始められたかも知れないと思う。気の若さと、絵を描くことへの愛着の復活から考えると本当にそう思う。

昨夏、ご入院中の豊中市市民病院の病室の窓から、大学のキャンパスをじっと見つめておられた姿が心から消えない。大阪大学の、ことに英文学研究室の来し方行く末に心を馳せておられたのであろう。ことに大学院の学生たちの将来に密接に関わる、英文学の研究と教育の将来について私たちは幾度も話題にした。目の前の困難や流行に左右されず、高邁な理念のもとに真摯な努力を続けるならば、必ず道は開けると信じようということに落ち着くのであった。そこには、OLR 創刊の頃、依るべき伝統も短く、未来に不安を抱きつつも研究者としての志を貫く夢を語り合った私たちの姿が蘇るのであった。

藤井先生を偲ぶ

河上誓作

藤井治彦先生がおからだの異常を気にされ始めたのは、1995年（平成7年）5月ごろである。その頃先生は文学部長の重責を担い、また、1月17日の阪神淡路大震災で被災されていたので、きっとお疲れが出たのだろうと話していた。かかりつけのお医者様のすすめで検査のため刀根山病院に入院されたのが5月後半。6月7日に精密検査の結果が出て、良性ではないことが判明。早速、薬と放射線による治療が始まった。6月23日、英語学のスタッフ一同でお見舞いに伺った。先生は治療のため少々発熱があり、白血球が減少していたにもかかわらず、いたって明るく振る舞われ、約1時間半、いろいろなことを話してくださった。30歳代は学位论文を仕上げ、40歳代は本を出版し、50歳代は今まとめているものが間もなくでき上がる。出版祝賀会はにぎやかな方がいい。これまで研究も教育もしっかりやってきた。自分の人生に無駄はなかったし、悔いることは何もない。ただ、読もうと思って買った本が読めないのが残念だ、とおっしゃった。限られた時間を意識したこれらの言葉にどう対応してよいのか、とまどってしまったのを覚えている。間もなく治療が効を奏し始めた。ご本も出版され、出版祝賀会が盛大に行われた。授業も再開され、しばらくはすべてが順調であった。しかし、昨年（1998年）7月に入って新たな病巣が見つかった。治療を始めてから約3年半。11月14日の阪大英文学会・創立50周年記念大会に出席されたのが最後となってしまった。

若い頃の藤井先生のお姿で忘れられないシーンがある。それは、UCLA留学から帰国され、談話会で報告会をされたときのことである。村上先生や毛利先生とご一緒に部屋に入ってこられたが、そのときの先生の勢いのある

学究的雰囲気と自信に満ちたお姿は鮮烈であった。お話の内容はもう忘れてしまったが、そのときの印象は今でも鮮明に残っている。

その後私は大阪を離れ、九州大学で14年間お世話になった後、1982年4月に、今度は同僚として阪大に迎えていただいた。先輩・後輩ということで随分親切にしてください、さまざまなことを教わった。この頃の藤井先生は、若き頃の眼光鋭い細身の先生ではなく、ふっくらとした、物分かりのよい大先輩に変わっていた。学界では常に第一線で活躍され、また、文学部では教授会の中核にあって信頼を一身に集めておられた。しかし、そうした先生の円熟したお姿のちょっとした言動の裏に、しばしば私は、若き日の藤井先生の厳しい姿をダブらせ、居住まいを正したのであった。

1996年(平成8年)6月、治療を始められて約1年が経った頃、藤井先生は、毛利先生の傘寿を祝うエッセイを寄稿された(「毛利先生に学ぶ」*HLC News* pp.2-3.)。少し長いが、敢えて引用させていただく。——「私は大学の良い英語教師の基本的な条件は、(1) 英語学、英米文学、英語教育など英語に関連する学問の専門的な研究者であること、(2) 英語そのものに興味をもち、英語の運用能力が高いこと、(3) 明るく誠実な性格で、感情が安定していて、物事を明快に説明する能力があることの三つではないかと考えている。このうち一番満たしやすい条件は(1)であって、研究者という条件を満たす人は実に多い。しかし(1)は満たして(2)は満たさないという不思議な人、つまり、理論とか、思想を論じるのは好きだが、英語そのものにはあまり関心も興味もない—悪くすると英語力の弱い—という人も存在するのだ。一番難しい条件は(3)で、これを満たす人は大変少ない。」——誠に耳の痛い、しかし的を得たことばである。そして毛利先生こそ、そうした意味で理想の英語教育者であったと述べ、次のようなことばで結んでおられる。「かつて毛利先生に教えられた学生であったことは、私の誇りであり、大きな幸せである—毛利先生のような立派な教育者にはついにいられなかったけれども。」

藤井先生は、若い頃からご自分のあるべき姿について厳しい条件を課し、

それらを一つ一つ実現する努力を決して惜しまれなかった方だと思う。しかも、そうした姿をご自身の行動でもって私たち後輩にはっきりと見せてくださった。先生の人生には確かに無駄はなかったろうし、悔いることは何もなかったにちがいない。「立派な教育者にはついになれなかった」とおっしゃることにより、先生はご自分がすぐれた教育者であることを証明された。ただ、少し早すぎた。こんなに早く自己を完結され、人生の幕を下ろすことはなかった。少しだけでも無駄を遊んでくださってれば、もう少し長生きをしていただけたのではないか、それが残念でならない。

真摯な研究態度

大庭幸男

あれは確か去年の12月4日午後6時ごろ、外は肌寒く、曇まじりの日でした。病院に着きますと、もうすでに他の先生方がお見舞いに来ておられましたが、皆さまの顔は何やら沈痛な表情でした。しばらくして面会の許可が出たので、病室に入りますと、そこにはかなり息遣いの荒い藤井先生が寝ておられていました。奥様より「何か声をかけてやって下さい。」と言われたので、励ましの声をおかけしようとしたのですが、残念ながらできませんでした。というのも、私は三年前に母を亡くし、その時の光景が浮かんできたからです。私はそれまで親孝行らしいことをしてこなかったので、せめて最期の別れの時には心より感謝の気持ちを伝えたいと思っていたのですが、結局自分の思いを何一つ伝えることができませんでした。今回も先生に対する思いの方が強く、それを言葉で表すことはやはりできませんでした。

その後、お医者様や看護婦さんの話を聞いて、どうも今夜が峠らしいということを知ったので、その夜は病院に泊まることにしました。夜2時半過ぎ、

にわかに病室が騒がしくなりました。行ってみると、先生は以前とは全く異なる穏やかな息遣いで寝ておられました。その内に先生の呼吸は少しずつ少しずつ間隔が広がり、とうとう聞こえなくなりました。永遠の眠りにつかれたのです。本当に穏やかな最期でした。告別式で、奥様が「一夜の眠りか永遠の眠りか分からぬようでした。」と言われましたが、正しくその通りでした。「人の価値は、その人の死にざまを見れば分かる。」とか申しますし、自分でも死ぬ時には何の蟠りや悔いを残さず死のうと思っていますので、今思えば、藤井先生の永遠の眠りは私にとって「理想的」と言える程のものでした。

その後、藤井先生のご遺体をご自宅までお運びいたしました。私は一睡もせず先生のお傍につかせていただき、その間、藤井先生とご一緒させていただいた7年間のことを振り返りました。以下、その中の一つを書かせていただきたいと思います。

私は先生と帰り道が一緒でしたので、阪大坂や電車の中などでいろいろなお話をさせていただきました。その話の中で私が一番感銘を受けたのは、先生の真摯な研究態度でした。

先生は、どんなにお疲れになっていようと、あるいは、どんなにお酒を飲んでおられようと、必ず、夜机については本を読まれたり、論文をお書きになったりしておられたそうです。例えば、先生は卒業論文、修士論文を読まれる時には必ずノートにその内容を書かれ、質問事項をメモされていました。1月という時期はまだ授業中でもあり、その予習や大学院の試験問題作成等で気持ちもあせり、卒業論文、修士論文にはとても手をつけられない時に、先生はいつも「もう読んでしまったよ。」といった平然な顔をしておられました。これは、毎日のそのような生活態度によるものと思われます。また、大学院の授業の準備につきましても定評がありました。恐らく徹底的に予習をされていたことでしょう。これは教師にとって極々当たり前のことですが、時には雑用にまみれて十分に準備ができないことがあります。そんな時に限っ

で、思わぬ質問があり、四苦八苦することもあります。藤井先生はそのようなことは皆無であつたろうと思われます。これも、日々の態度によるものでしょう。それから、論文についてもそうです。先生は締め切り日の数ヶ月も前に原稿を書き上げられ、締め切り日まで「寝」かされたそうです。私など、先生とは全く正反対で、いつも締め切り日に追われて、精神的にパニックになることがしばしばあります。時間に余裕のない時に書いた論文には良いものがある筈がありませんので、自分自身大いに反省しているところです。また、私が文学部に移って間もない頃でしたが、「論文の数が自分の年齢とほぼ同じになったよ」とか「博士論文も良いものを書かなくてはね。」などと言われたことがあります。これは決して自慢とかいう次元の低い話ではなく、なんの術いもなく自然に出たお言葉でした。

私はどちらかと言えば集中型ですので、例えば、何の強制もない時には、ビールを飲みながら、テレビで野球を観戦したり、バラエティ番組を見たりしてのんびり過ごしてしまいます。しかし、藤井先生は、私とは異なり、根からの学者で、日々研鑽を積まれていました。先生は、確かに時として厳しい意見を述べられることもありましたが、それにはそれなりの理由をお持ちであったからではないでしょうか。その理由の一つが、並外れた勉強量に見られる真摯な研究態度であつたように思われます。

ある日、奥様に手紙をお出しする機会があり、「先生のような真摯な研究態度を見習います。」と書きました。しかし、実行できたのは僅か2ヶ月間だけで、今は元に戻ってしまいました。やはり私は藤井先生のようになれませんでした。

しかし、空海の言葉に「重々帝網なるを即身と名付く。」とありますように、重々帝網を体験し、最後はうまく帳じりが合った人生を全うし、そして、「一夜の眠り」の如く眠りにつきたいと願っています。藤井先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌。

藤井先生の思い出

森 岡 裕 一

藤井先生とともにすごした時間の中でとりわけ充実していたのは、たった一年間の文学部助手時代である。大学卒業後5年ほどサラリーマン生活を経て阪大の大学院に入った当初は、先生も多少勝手が違ったのか、なんとなく煙たい感じを持たれていたのではないかと思う。それがどういうわけか、修士2年を終えた時に助手に任用していただき、当然ながら先生との距離もぐっと縮まった。

藤井先生は出講日に奥様お手製のお弁当をご持参になり、助手室でゆっくり時間をかけてお召し上がりになった。私もお茶の準備だけして、自分も昼食を食べながら、その間先生とあれこれお話をさせていただくことになる。先生に教えをうけたものなら誰もが懐かしく思い出すあの藤井節を毎週2、3日ライブで独占できたのだから、そのことひとつをとっても、助手として過ごした1年間に有難く思う。

話題はむろん多岐にわたった。学界の裏話や研究者批判など、いつもながら先生一流のやんちゃな毒舌が楽しかった。けっこう手厳しい批判もされるのだが、なぜか嫌味がなく、批判をしている相手に対する愛情が感じられるほどに、先生のお人柄がにじみ出ていたのを思い出す。

当時私は今よりは饒舌で、先生に対してもかなり辛らつな意見をぶつけた記憶がある。一番印象的なことは先生の文章について感想を述べた時のことで、要するに、先生の文章スタイルはあまりに禁欲的で潤いと面白みに欠ける旨を、大胆にも申し上げたのである。たしか、フィッツジェラルドとヘミングウェイを例に挙げて、論争らしきものをした覚えがある。むろん、先生は

ヘミングウェイ派で、当時私はアンチ・ヘミングウェイの立場だった。私の意見はまったくいいかげんな印象を述べたに過ぎなかったのだが、ひょっとしたら、先生も多少そのことを気にしておられたのではないかと思う。私が助手を辞め、言語文化部に配置換えになった後も、何か書かれるたびに抜き刷りを頂戴し、それについてコメントをした折、スタイルについていつも意見を求められた。私としては、先生の論文の文体について依然としてある種の華麗さを求めたい気分があり、その旨を申し上げた。

むろん、先生は私の無責任な感想で主義を曲げられるような方ではなく、その後も論文のスタイルを変えられることはなかった。だが、その後あちこちに書き始められたエッセイでは、すこし論文とは違う文体を意識されていたのではないかと思う。硬質の文体は健在ながら、論文では抑制されていた遊び心が充満している。エッセイを読んで感動した私が、早速そのことを先生に申し上げ、かつての非礼をお詫びした時、先生が「なっ、そう思うだろう、そうだろう」と嬉しそうにおっしゃった声を今だに忘れることができない。エッセイの文体から逆に先生の論文のスタイルを読み返してみると、一見無愛想に見える文体の裏になかなか味わい深い世界の広がりを感じられる。それが感じられるようになったのは自分が少しは進歩したからか、などと勝手な解釈をしながら、このところフィッツジェラルドよりはヘミングウェイに肩入れしてしまうところなど、藤井先生の軌跡を、ずいぶん遅まきながらよちよち辿るわが身の頼りなさがよけいに実感される。

十 八 歳 の 頃

松 平 陽 子

今から四十年以上もまえ、阪大文学部の教養課程が南校と北校とに分かれていた頃、わたし達は北校に通う新入生だった。当時の大学生の常として角帽をかぶっている人が多く、藤井さんの帽子は特に真新しく感じられたことを覚えている。時代の風潮もあっただろうが、今とくらべると文学部全体の学生数が格段に少なかったこともあって、学生たちはお互いに親しかったし、よくまとまってもいた。コンパやピクニック、校舎の屋上でのフォークダンス、そして大学祭といったイベントにも出演して、一緒に童謡を踊ったりした。その時の写真は、少しセピア色になっていまも手元に残る。

大原美術館に案内してもらったときの写真もある。そのアウトティングは、単調な女子高時代を終わったばかりの十八歳にとっては、大学生になったことを象徴するかなりエポック・メイキングな出来事だったにちがいないが、残念ながらどんなことを話したのか記憶にない。クラスメートたちが藤井さんのご自宅に招かれるのも、そう珍しいことではなかった。食堂でのご家族の会話に、独特の開かれた雰囲気があったことなど、今でも少し覚えている。

藤井さんとの話の中で、強く印象に残ったことがある。それは、藤井さんが一生の目標をその時点ですでに決めておられた、ということだった。こちらといえば、受験のために我流の勉強をする以外は、日溜まりの廊下の隅っこでSP盤のシャンソンを聞いたり世界文学全集を読んだりといった、全く脳天気な生き方をしてきたいわば子供にすぎない。だから、将来は父と同様卓越した仕事をしてしかるべき大学で教鞭をとるのだと、あの濃い眉を上げてきっぱり言い切る藤井さんは、自分とは世界の違う大人に見えたのである。(ついでに言えば、お通夜のときうかがった中・高時代の先生のお話による

と、藤井さんのこの志は、大学どころか中学時代にすでに決まっていた、ということであった)。

ずっと後になって、わたしの勤め先の大学での講演を藤井さんをお願いしたとき、それに先立つ紹介のなかで、わたしはこのエピソードに触れた。昔のわたしと同じように、自分が何をしたいのか、何になりたいのか、さっぱり分からないといった顔で座っている学生たちに、早く将来の計画を考えることの大切さを分かってほしいと思ったからだ。

しかし振り返ってみると、わたし自身は、こんな明快な気づきのチャンスを与えられたにもかかわらず、それ以後も相変わらずの生き方をしてきたようだ。人生が時たま差し出す偶然性や啓示を取り入れながら自分を作っていくのだ、などと言葉では言えても、要は、いい加減にだらしなく、規範や目的や克己心をあまり意識することなく生きてきたということだろう。

以前、同年輩の喜志哲雄先生が、何かの折りに言われたことがある。「藤井君ほどよく勉強する人はほかにいないでしょう」。

十八歳で与えられた出会いの影響は、結局のところ、とても大きいものだったのかもしれない。

藤 井 さ ん の 絵

渡 辺 孔 二

今或る油絵をじっと見ている。絵の下方に一本の道が右上に伸びていて、その道の上手の坂に木々が数本配置されている。さらにその上に丘があり、数階建ての建物が二棟ある。どうやらマンションのようだ。建物の色調で一番目立つのは白だが、屋根の部分は一棟が薄い赤茶色で、ブルージュのベルタワーで見た家々の屋根の色に似ている。もう一棟の屋根はチョコレート色

で、オックスフォードで見かけた屋根の色だ。空は夏を想わせる明るいブルーで白い雲も出ている。この絵と同じものはそのコピーも含めて、おそらく世界中どこを探しても見つからないはずだ。

今から三十年いや四十年近く前のことになるが、修士課程の二年のとき、サミュエル・ジョンソンをまねたわけでもないが、金もなく将来どうなるかもわからぬ、ないないづくしの状態で無謀にもぼくは結婚することになった。そのとき藤井さんに「結婚します」と報告すると、「そうか。おめでとう。プレゼントは何がいい?」と言ってくれた。ぼくは間髪を容れず、「藤井さんの描いた絵がほしい」と頼んだ。それから数週間して、手作りの額縁に入った上述の油絵をいただいた。この絵の主題などについて藤井さんにおききしたことは一度もないが、ぼくはこの絵の題は『夏が丘』もしくは『サマーヒル』ではないかと勝手に考えている。

藤井さんは神戸がお好きで、ぼくが住んでいたアパートにもぶらりと立ち寄ってくれたこともある。ぼくの部屋からは海が見えた。そのアパートは「海に見える丘」にあったのだ。このアパートに藤井さんは例の薄い茶色っぽい色のトレンチコートを着て現われた。彼のあの颯爽とした姿も二人して歩いた桜の並木道もついこの間のことのようによく憶えている。「時よ止まれ」と叫びだしたくなった青春の思い出になっている。

神戸には奥様の実家もあり、その後藤井さんと神戸でお会いする機会も多くなった。ぼくの出版記念会にも二回とも来て下さり、実に見事なスピーチを二回ともして下さった。(披露宴の司会もして下さった。それから、これは今まで誰にも言ったことはないが、三十数年の間に、有名私大——三十歳代の頃——と国立大——五十歳代の頃——と二度も就職の話を持ち出して下さった。二回ともぼくの家族の都合でご辞退申し上げたが、いやな顔ひとつされなかった。藤井さんはほんとうに後輩思いだった。いろいろお世話になった。あるときレックス・ウォーナーの話をしていたら、次にお会いしたときには、「これあげる」と言って、ウォーナー関係の本をくださった。こうい

う思い出は他にもいろいろある。) イギリス人やアメリカ人とお会いしたあとや、なぜそうなったのか記憶も薄れて定かではないが、気がつくと二人だけで神戸の六甲あたりの道を歩いたり喫茶店に入ってダベったりしていたこともあった。

藤井さんが持ち出される話題はイギリス文学に限らなかった。絵画や音楽は言うにおよばず、個人情報から野球情報まで、実に守備範囲が広く、きいている方も楽しかった。しかし決して冗舌にはならず、頃合いを知っていて、付き合うのがしんどくなるほど話が長時間に及ぶことは一度もなかった。藤井さんは少ないことば数で多くのことが語れた数少ないスコラーのおひとりだった、とぼくは今でも確信している。

藤井さんはほとんどいつも、自説をピンッと要領よくはっきり言ってくれるので気持ちがよかった。「これには説がいろいろあって…」といった、発言の無意味に陥ることはほとんどなかった。自己の所信をすっきりした形で示してくれた。たとえば、大学教師の教室での学生指導の仕方とか成績評価法にいたるまで、多くの大学教師が手の内を見せたがらないのに藤井さんはぼくに向かって、「ぼくはこうしている」と具体的に教示してくれた。そのご教示をぼくは、これまた今まで誰にも言ったことはないが、大学教師になって何十年も守っている。

藤井さんはどんな問題にも、かなり高いレベルの品位を大切にしながら自らのパースペクティブに基づく確信を吐露されていたが、あの姿勢は「竹友薬風の息子」という重圧を自らの実力ではね除けたときに身についた清々しさと無関係ではあるまい。

海に見える神戸の丘はもしかすると藤井さんの精神構造と系列関係にあるトポスなのかもしれない。藤井さんの絵の丘の上のマンションには外景が見渡せる窓がいくつも描かれている。藤井さんが若いときにぼくに贈ってくれた絵は、ぼくにとっては、クロンショールがフィリップ・ケアリに贈った「ペルシアじゅうたん」の一片に勝る。ぼくは今、神戸の丘の上のマンションの

ぼくの書斎の窓から眞夏の暮れかかった西の空をじっと見ている。

若き日の藤井治彦さん

今 沢 達

「君たちの払う授業料では教室の窓ガラスの一枚分にもならないのだから」と後輩を激ます藤井さんの声は気迫に満ちていた。英文科の三年生に進学した春の歓迎会の席でのことである。藤井さんは修士課程に進みプロフェッショナルを目指すことについて深く心に期するところがあったにちがいない。英文学という、すぐには世のためにもなりそうにない学問を、国民の税金で学ぶ身分であることを新入りのわれわれがどれほど自覚しているか鋭く衝いた言葉であった。

後に、このことを藤井さんに話すとそんな失礼なことを言ったのかと笑っていたが、ともかく本当に人生を大切に生きることを考えていた人であった。それは安易に政治運動に走る傾向に対する批判であり、同時に私生活に埋没する逃避的な文学青年の社会意識の欠如への批判でもあったが、家の学問を継ごうとしている秀才の粋をはるかに越えた強烈な個性に出会ったという思いがしたものである。

大学院の演習では先生よりも先輩たちが一層恐ろしかった。中でも、藤井さんの緻密な読みと正確な知識、徹底した準備による指摘に会うとこちらはひたすら小さくなっているほかなかった。ただ、より鮮明に記憶に残っているのは、談論風発してやまない藤井さんの魅力的な座談である。例えば、講義の後、ハベル先生を囲んで石橋のうどん屋に行った時などに藤井さんが聞かせてくれた吉田健一の文体の物真似であり、演習の始まる直前、知人が致死量の毒薬を誤飲してしまったことを伝えるときの興奮した口ぶりである。

相前後して、ヘミングウェイの死が伝えられたときもそうであったが、人の生死というものに真っ向から向き合う真率な態度にひそかに感動したものである。

しかし、他方、研究に専念するというより、個人的な悩みを抱え文学や哲学を読み漁っていた私が、たまたま神秘思想や生嗜りのペルクソン哲学への関心を漏らしたりすると、たちまち藤井さんから「イージーになりがちなんだよ」と痛棒を食らうのであった。地道な努力を惜しんで一挙に救われることを求める安易さを見すかされたのであろう。その厳しい姿勢には近寄りがたい思いをしたこともある。

そうした中で、*O. L. R.* 創刊号に発表された藤井さんの論文「*Lycidas*——ひとつの解釈」は新鮮な驚きであった。数多ある過去の研究の重圧をともに受け止めて、訓詁の学の手続きをきちんと踏んだ議論の中から、自分の生に対する思いを語る藤井さんの肉声が響いてきたのである。そこでは演習室の藤井さんと座談の藤井さんが見事に釣り合いを保って息づいていた。

当時の藤井さんの文学と文学研究への姿勢がよく表われているのは *O. L. R.* 第5号に発表された平井正穂著『イギリス文学試論集』の書評であろう。同じくキリスト教の信仰をもつ英文学者として、藤井さんはこの先学の方法意識の高い試論と四つに組んで奮闘している。平井氏のイギリス文学史の構成は文学的、文化的、人間的コンテクストの三層からなるが、同氏が人間的コンテクストにおける同質性の体験を余りに重視することに対して藤井さんは率直に危惧の念を表する。平井氏の場合には彼我の異質性の自覚と同質性への希求の間に「痛いまでに張りつめた緊張」があるが、それを欠いた研究は座標を失った職人芸になると断わった上で、「研究の途上では、ひとたびは意識的に人間的コンテクストの問題を忘れ、あるいは論じ得ざることとして括弧の中に入れ、もっぱら、文化的コンテクストの瑣末な細部、人間的コンテクストからみればおよそ非本質的な細部に執着すること」の重要性を強調し、更に、一步進めて、人間的コンテクストにおける体験は表現という段

階では、文化的コンテクストに回帰せざるをえないのではないかとまで言っている。その議論において特に目を引いたのは「お互いに人間なのだからという発想から低次の理解を求める時、人間性という言葉は、鈍い、卑俗な、虚無的な情緒の中にその本質を失ってゆく」という鋭い指摘であった。

ここには安易さを排することを身上とした若き日の藤井さんの批評精神が躍如としている。しかし、平井正穂氏への批判はまた自らの課題でもあった。藤井さんの研究者、教育者としての誠実な歩みと業績を見ると、その課題を一步一步休むことなく果たしてゆく道のりであったことがよく分かるのである。

藤井さんの意見と文体

植 田 和 文

いつも変わらぬあの上機嫌の笑顔、張りのある声の響きが、今もよみがえってくる。藤井さんと最もよくお会いしたのは、60年代半ば頃、藤井さんが研究者としてスタートされ、私がまだ大学院生であった頃である。先輩には優秀な人がそろっていて、私は圧倒された。今から思えば、藤井さん始め先輩たちは、当時歴史の浅かった阪大英文科の基礎を築くべく、気負って頑張っておられたのだろう。藤井さんは自分にも他人にも厳しいかたであったが、遅く英文学に志し、学年としては少し開きのある私には、いつも援助と激励を惜しまれなかった。

60年代は日本中が興奮していたような気がする。安保闘争、キューバ危機、ヴェトナム戦争、高度経済成長、東京オリンピック、新幹線開通、そして学園闘争。青年の多くは、意識変革と体制変革に心情的に共感していた。だから、藤井さんが現体制を支持すると言い、「自由と民主主義を守るため

に立ちあがる」と発言したのはショックだった。別の時、「文学の力はたいしたものだ」と言われたが、これには私も異議はなかった。当時、文学は栄光の座にあって、文学作品の中に、人間にとって本質的な真実がひそんでいると、私たちは考えていた。サルトルらの実存主義が盛んな頃で、私はそれにかぶれ、ドストエフスキーやフランス象徴派にも惹かれた。藤井さんの態度はきわめてアカデミック、かつリゴリスティックで、脇道にそれることなく、英文学の正統（正典が揺るぎなく存在していた）を究める態度を崩されなかった。そういうことから想像しにくい、喫茶店などでの雑談の折りに、芸能界やプロ野球など俗なる話をなさることもあった。これは藤井さんの、清濁（聖俗）あわせた、人間としての幅を示すものだろう。

藤井さんは学問における普遍的価値をめざしておられた。だが、本誌第1号に載った「*Lycidas* — ひとつの解釈」には、60年代の刻印が見られるように思う。若者が、人間を押しひしぐ運命への予感、虚無に向かう暗い思いを振りきって、ついに立ちあがり、マントを払い、ひそやかな決意をするというのは、今読んでも感動的だが、ここには、運命に抗して自分の責任において選択をするという、実存主義的ヒューマニズムが影を落としているのではないか。また、詩のある語句にこだわり、それに深い意味を語らせるのは、当時優勢であった新批評の手法を、実践しているのではないか。そして「ひとつの解釈」と謙遜してはいるが、唯一正しい解釈をめざす意欲が感じられるのも、当時の風土のなせるところであろう。

それにしても、藤井さんは驚くべき明晰な文体を持っておられる。そのそばへ置くと、大抵の文章はごたついて見える。『イギリス・ルネサンス詩研究』のどのページを開いても、端正で正確な文章に出あう。「ミルトンの文体は模倣できない」というエリオットの言葉を、藤井さんは引用しているが、藤井さんの文章も模倣できない。それは莊重体ではなく、平明で清新な文体である。二三行ならまねもできようが、終始こういう透明でしかも含蓄ある文章を書き続けることはできない。ある時、私は羨望もあって、「藤井さん

の論文は、レース織りのように精密にできているけれど、もう一回クライマックスが来るのではないか、という予感だけで終わってしまいますね」と憎まれ口をたたいた。意外なことに、この言い方を藤井さんは喜んで下さった。信仰の正しさと家父長的権威を備えたミルトン、アレゴリーの絢爛たる絵巻物で王国の栄光を讃えたスペンサー、というふうにと考えると現代には縁遠いように見える大詩人の、現代に通じる問題と面白さを、かくも明快・精緻に解明した人は、藤井さん以外誰もいない。それを可能にした理由の一つは、透徹したスタイルであろう。

「*Paradise Lost* と現代」で藤井さん自身が述べておられるように、やがて文学の風土は一変した。文学もそれを読む人間も、その時代の社会・文化状況に制約されている。作品に内在的な価値がひそんでいるわけでもなく、唯一正しい解釈があるわけでもない。文学の特権は薄れて、他の無数のテキストと同じ一つの資料になった。今は私なども大学でアメリカ文化論を担当している。60年代に藤井さんも私たちも信じた普遍の人間性は、疑わしいものになった。80年代後半だったろうか、阪大英文学会でお会いした時、「植田君、ヒューマニズムの時代は終わったんだよ」とおっしゃった。別に深刻な様子もなく、快活な笑顔はその時も変わらなかった。藤井さんはつねに鋭い知性で時代と向きあっておられた。

イン・メモリアム 藤井治彦氏

森 道 子

本 1999年 7月中旬にイギリス・ヨーク大学で第六回国際ミルトン・シンプोजウムが開催された。世界各国からミルトニストが参集するなか、特に日本ミルトン・センターの会員たちは何かにつけ、藤井さんのことを偲び惜

しむのであった。それというのも、1991年のカナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学での第四回に参加していた者が多く、その年の日本代表顧問委員として、また、一つのセッションの司会者として、一際活躍しておられた彼を記憶から蘇らせたからである。ヨーク大での学会開催は藤井さんももちろんご存じで、アール・マイナー夫妻や私の参加予定も承知しておられた。しかし、一言も未練や羨望がましいことは口にされなかった。ご病気が彼の活動を妨げるようになってから一層理解したのであるが、潔い断念がその美学であったと思う。

初めて藤井さんにお会いしたのは、学部生になって卒論のテーマを主任の村上至孝教授に提出に行き、「博士課程にミルトンを研究してる人がいますから紹介しましょう」と言われ、指定の日におそろおそろ伺ったときである。まさかそのとき、村上先生が藤井さんに、「学部の女の子でミルトンをしたいというのがいるが、ゆめゆめミルトンなんかしてもものにはならん、とだけは言わないように」と釘を刺されていたとは知る由もなかった。そんなことはおくびにも出さず、ティリヤードの名著『ミルトン』をまず読んでごらんと指導してくださった。岩波文庫の『失楽園』はまだ藤井武訳のみであったが、「ご親戚ですか」とあてずっぽうな質問をすると、「いや、竹友藻風は父ですが」と言われ吃驚してしまった。

その後も次々と竹友・藤井書庫から貸し出してくださったり、神戸丸善でばったりお会いしたり、戦前母が門をくぐっていた洋画のアトリエ「赤艸社」に所属しておられることが分かったり、少しずつ隔てが外れていった。藤井さんは齒に衣着せぬ的確で厳しい家父長的口吻の下に、早くからフェミニスト性を備えておられたから、こちらも言いたいことを率直に表現できた。相手をたじろがせながらほめ励ます言葉も忘れられない巧みさは、悲劇の終焉に射す一条の光のようだなと思った。

思いがけず大学院に進路を取るようになって、博士課程修了の研究発表会にも出席でき、藤井さんの『牧人コリン・クラウトの時間感覚』を拝聴した。

この同じ頃、OLR 第一号発刊に奔走しておられ、『*Lycidas* ひとつの解釈』を寄稿された。グレイのトレンチコート姿に、眼鏡の奥できらりと光る目は今も印象に残っている。院生の談話会には出席され、談論風発のイニシアティブを取られ、その意見はいつも刺激的で、示唆に富んでいた。年始には村上先生宅に皆で伺い、マイナー先生のご尽力で UCLA が共通の留学地となったり、日本英文学会、西洋古典学会、比較文学会を始め、日本ミルトン・センター、関西十七世紀英文学会と、共通の場、友人・知人は拡がっていった。「あなたは死ぬ思いで勉強したことなどないだろう」と家事・育児に忙殺され、研究不足の私を多分蔑まれつつ、マイナー先生、アイリーン・サミュエル、ハミルトン来日の折りには連絡を取ってくださっていた。

村上、毛利可信両先生に続いて、藤井さんもご退官後は大手前女子大に来られる予定であり、教授会も承認済みであった。英語文化学科はもちろんのこと、美術学科にも美術に造詣の深い彼の就任を心待ちにしている教授があった。1998年4月草々に、ご夫妻でずっしり重い業績と履歴書とを持って、新しい職場となるはずの夙川キャンパスをいそいそと訪ねてくださった。桜の特に美しい年で、爛漫と咲き誇る夙川辺りを散歩し、苦楽園のイタリア・レストランでワインで乾杯した。そのとき桜花は藤井さんの大手前入りを歓迎、祝福していると思えなかったが、後から考えると、短く儂い命の象徴でもあったのだ。最後にお会いしたのは亡くなる十日前だったが、それまでになく弱々しげなご様子で、「一日でも大手前に行きたいが、ぼくが大手前で教えることは神の計画にはないね」とおっしゃるので、「人間に測り知れないのが神の計画ではありませんか。どうして藤井さんに分かりますか」と必死で否定したのを覚えている。同時に、「恩寵」という彼の好んで使われる逆説的な言葉が、茫漠と脳裏をかすめていた。

振り返るとはぼ四十年の歳月にわたるご交誼であるが、藤井さんは共に学んだ仲でも、恩師でもなく、同僚関係も始まらないまま終わってしまった。しかし、「同窓の先輩」では言い尽くせない。そこで往時近時を思い巡らし

っていると、「藤井君にも君に対しても、いつも兄貴と思ってる」という、アール・マイナーの言葉が浮かんできた。今まで気がつかなかったが、「兄」のような存在であった。

新幹線と夕暮れの青い空

筒 井 均

藤井さんのことを思い浮かべると、お会いしたその時その時の、藤井さんのことばが聞こえてくる。ある人の字体について「書いた字を一度お茶漬けにして乾かした字」とか、ある人を紹介してくださった後「偉い人です」と付け加えたり、「フェミニズムが今一番倫理的だ」とか、とても印象に残ることばが浮かんでくる。そしてそのことば一つ一つが、藤井さんの精神の形を表している。

藤井さんの訾咳に接して三十年余り、そのことばの端々から窺い知られる藤井さんの精神の形が、私には今でも何かの澱のように残っている。その幾つかをここに書いておきたい。

待兼山の坂を降りて阪大下の信号に至る少し手前の、憩食堂前の喫茶店で話していた時、眼鏡を少し押し上げるようにして店に入ってきた女性を見ながら、「中程度の範疇」の話をされた。1960年代半ばのことである。確かこの時の話題は、論文を如何に書くかということであった。「中程度の範疇」とは、イギリス小説とかイギリス演劇、あるいは西洋文学といった大きな範疇ではなく、また一つの小説作品におけるある場面のある表現といった小さな範疇でもなく、その中間に位置するような主題であるという。「そういう主題を見つければね、論文なんか幾つでも書けるよ」と、例によって藤井さん特有の大きく口を開けた笑い顔を見せた。今思えばそれは、藤井さん流の

私に対する励ましであつたろうと思う。ただ断っておけば、私にはその時、論文を数多く書くという気などなく、だからこの時、この「中程度の範疇」について、藤井さんに詳しくは聞かなかった。数年前、富永健一『社会学講義』（中公新書）を読んでいて、「中範囲理論」（middle range theory）ということばに出会い、「中程度の範疇」とはこのことを言っているのではないかと考えた。

藤井さんが最初入院から退院され、初めて大学に来られた日、たまたま文学部に非常勤講師として出講した私を待っていてくださり、助手研究室での話の折、このことを私が言うと、藤井さんは、「変なことをよく覚えてるね。そうなんだ、あれは社会学の理論だね」と、助手の好井さんにその内容を説明されていた。そのお話を聞きながら私は、今更ながら藤井さんの知的関心の広さに感嘆の想いを強くしていた。何故なら、藤井さんはおっしゃらなかったけれども、この Robert K. Merton の理論が発表されたのは 1957 年であり、今では社会学の入門書には必ず記載され、社会学理論史の大きな転換点になっているらしいこの理論も、当時 1960 年代半ばではまだ、それ程定着していなかったと推定されるからだ。この日、藤井さんに、何故この理論に関心を持たれたのか聞いておかなかったのが残念で仕方がない。時代の新しい側面への関心と言えば、ピエール・カルダンの名前を初めて耳にしたのも、藤井さんからだった。それがいつのことで、どういう場面であつたかは記憶にないのだが。

1998 年 12 月 7 日、藤井さんの告別式の日、川北文学部長の弔辞の中で、「こちらの方が教授会ではとおりやすいだろうが、品がないからね」という藤井さんのことばを耳にした時、私は思わず落涙していた。そして、唐突にも、東京駅新幹線ホームが眼前に浮かんでいた。この場面の記憶はそれ程明確ではない。多分ある年の、東京での英文学会の帰途のことだったろう。たまたま同じ列車に乗ることになり列車を待っていて、反対ホームに停車中の列車を見ていた時、藤井さんもその列車を見ていて、「これがスペンサーの

世界なんだ」と言われた。何のことか分からずきょんとしていると、「あの青い空と上手くあっているだろう」という深い声が聞こえた。そのとき私は、感動を覚えたというのではなく、あ、これが藤井さんの世界なんだな、と思っただけである。しかし川北部長の弔辞のことばを聞きその時のことを思い出したのは、それなりの私の中の理由があるだろう。藤井さんがいなくなってから数ヶ月、何も手に付かず亡羊としていた私が、時に考えていたことはこのことだった。いまだに判然とししないのだが、今の時点で言えるのは、調和のとれた品の良さが、藤井さんの精神の核だったのだ、ということである。

藤井さんから結婚祝いに頂戴した陶皿はドイツの製品で、16、7世紀の戦場が描かれている。その皿を見るたび、祝辞として頂いたパオロとフランチェスカの話が、その声と共に蘇る。

藤井治彦先生を偲んで

久野幸子

思えば、随分長いあいだ、お世話になった。最初にお会いしたのは、私が名古屋大学大学院の修士過程を終了し、大阪大学大学院博士過程に編入学させていただいたときであった。「僕が藤井です」という自己紹介の後、「先日ある学会で、川崎さんが若輩の僕の研究を認める発言をしてくれたのが、とても嬉しかったんですよ」と川崎先生のお話をされ、続いて、私を川崎先生の弟子の一人として、十七世紀英文学研究会関西支部の次の例会で紹介してあげようとおっしゃった。その例会で、私はジョン・ダンについてささやかな発表をさせていただいたが、お聞きくださったのは、藤井先生のほか、数名の先生方であったように思う。三十年も前の話である。

以後、とにかく、慣れない関西での大学院生活には色々戸惑うこともあったが、十七世紀の会の会員ということで、心強く感じる機会も多かった。二年後、私は一身上の都合で名古屋に戻り、就職先も名古屋に決まったので、結局、名古屋で暮らすことになった。が、研究会には引き続き加えていただき、今日まで、新幹線で通い続けている。これは、藤井先生を中心に会員の方々がこの研究会を研究活動の拠点とするために地道な努力を重ねていらっしゃることに、私自身共感したからだと思う。例会では、ときに藤井先生ご自身の極めて刺激的な研究発表も伺えたり、先生がご出席の際は、必ず、研究発表に対する先生の鋭く核心を突いたコメントや、先生と発表者との熱のこもった質疑応答を楽しく拝聴することができた。そして、先生の文学への熱い思いと真摯な研究態度を肌で感じさせていただき、結果として、実に多くのことを学ばせていただいたと思う。恒例の懇親会の席では、たびたび親しく談笑させていただいた。日本文学や歴史、音楽についてもあれこれお聞きしたように思う。それでも、川崎先生が亡くなられたときもそう思ったが、藤井先生にもっと色々真剣に伺うべきであったと今、ほぞを噛む思いでいる。

博士過程在学中の一番の思い出は、藤井先生とご一緒に京都大学の御輿先生のミルトンの『樂園喪失』についての講義を聴講させていただいたことである。学部生のための授業だったと記憶しているが、教室の隅で、藤井先生と並んで、毎週、御輿先生の名講義を堪能させていただいた。机に腰かけ、あるいは立ったまま、淡々と語りかけるように話される御輿先生のご講義の内容の素晴らしさは言うまでもない。が、当時の私にとって更に新鮮だったのが、藤井先生がさりげなくお示しになる御輿先生への心からの敬愛の念に満ちた謙虚な姿勢であった。

約二十年前、私が始めて英国のケント大学のサマー・コースに参加したとき、推薦状が二通必要であった。そこで、厚かましく藤井先生にもお願いしたところ、ご多用中にもかかわらず、即座に快くお引き受けくださり、本当にありがたく感謝した記憶がある。

また、あるとき、東京で行なわれる日本英文学会大会に参加するため、名古屋駅で新幹線に飛び乗ったところ、偶然、先生もお一人でいらっしゃり、東京まで先生を独占する(?)機会に恵まれた。そこで、私は興味深いお話をいくつか伺ったが、それらの中で今もよく覚えている話題が二つある。一つは藤井先生の漏らされた「川崎さんの研究活動に対する不満」である。藤井先生には、川崎先生が文学そのものの研究ではなく、〈庭園〉や〈森〉と言った文化や文化史研究のほうに行ってしまったことが「残念でならない」とのこと。藤井先生は本当に文学そのものを深く愛していらした方だと思う。〈文学〉の研究について、あれほど真摯な態度で臨まれる方は、現在、もう殆どいらっしゃらないのではないだろうか?もう一つは、神谷美恵子先生との思い出である。私には津田塾大学在学中、神谷先生のフランス語の授業を受講した経験があり、その話から神谷美恵子論になったときのこと。藤井先生には神谷先生に私淑して西宮の御宅に通われた時期があり、その頃は神谷先生とは随分親しい間柄でいらしたらしい。「しかし、僕はあることで、神谷先生が許せなくなって、通うのをやめたのですよ」とおっしゃった先生の寂しげな横顔が今も思い出される。当時、私自身、神谷先生のご著作や実践活動に深い感銘を覚えていたので、尊敬する藤井先生のそのお言葉に衝撃を受け、言葉を失い、人間関係の複雑さ、人間存在の本質的矛盾や弱点などを痛感させられたからでもあった。

藤井先生は、私が〈ダンの諷刺詩〉にひたすらこだわっていた頃、「諷刺詩のどこが面白いの?」と茶目っ気たっぷりにお尋ねになったことがあった。ところが、馬齢を重ねたのにもかかわらず、私が胸を張ってお見せできるようなものを何一つ書き上げないでいるうちに、川崎先生ばかりか、藤井先生まで、別の世界へ旅立たれてしまった。しかし、先生の残された貴重なご著作との対話のなかで、いつか何らかの解答を見つけたいと、私は今もひそかに願っているのである。

(1999・8・14)

「Paradise Lost と現代—人間像をめぐる—」再読

—藤井治彦先生の学風管見—

正 木 建 治

昨年師走の候、先生は卒然とこの世での生を放棄された。宙空の一点を凝視し、何かに耐えているような、いや何かに戦いを挑んでいるような厳しい表情で歩かれている姿を仁川駅の近辺でよくお見かけした。筆者の姿に気づくと、片手を軽く挙げて、にこやかに声をかけて下さった。仁川駅のK書店ではくつろいだ表情で立ち読みされる姿もしばしばあった。そんなある日、K書店の近くの宝塚ホテル経営の喫茶店に誘われたことがある。その折りに、ロバート・ブラウニングとテニソンについて会話が弾んだことを覚えている。先生は、自分はテニソンも好きだが、ブラウニングの方にいっそう魅かれると言われた。筆者はその言葉に刺激されて、ブラウニングの作品を演習で読んでみたが、表現の難解さに歯が立たなかった。そこで、『イギリス・ルネサンス詩研究』出版記念会の席で言葉を交わした機会に、ブラウニングの難解さを訴えたところ、その難解さが魅力なんだ、と先生は破顔一笑された。

ちなみに、立ち読みの常習者を任じておられたK書店はかつてはみず書房の本や思想・文芸批評などの高踏的な書物を並べていたが、もうその面目は全く失っている。宝塚ホテルの喫茶店はいまは閉店されている。そして何よりも、阪神大震災で、仁川の風景も一変してしまった。長年この土地に親しまれた先生には、かつての仁川は原風景として心中に生きていたかもしれないが、その原風景と震災後の現風景との落差はやはり異様な圧迫感を精神に与えていたのではないか、これは筆者の実感からの想像である。

『イギリス・ルネサンス詩研究』は、スペンサーとミルトンを車の両輪とした、先生の研究の集大成になってしまった。第3・4期の集大成が当然期

待されていたのに。テニソンも好きだが、ブラウニングにより魅かれると言われたが、スペンサーとミルトンの関係も、それに類したものだったのだろうか。スペンサーの感覚とミルトンの理性——この二面の葛藤あるいは共存はこの論集について何事かを語りかけてくるし、何よりも論者の内面性を浮き彫りにしてくれる。テニソンとブラウニングを話題にしたときに、なぜスペンサーとミルトンのどちらがお好きですかと聞かなかったのか。多分、言っではならない愚問だと思ったのだろう、そのときは。

『イギリス・ルネサンス詩研究』の中で、「*Paradise Lost* と現代」からいろんな感想が湧いてきた。もっとも印象深かったのは、「英米文学の研究や教育にたずさわっている者ならば誰もが意識しているように」という冒頭の言葉だ。「英米文学の … 教育にたずさわっている者」に、教育者としての強い情熱と意志が刻まれているからだ。研究者が唯一接することができる現実とは、教育という現場でしかない。大学紛争を契機にする、1960年代以後の教育現場という現実の如実な変化と歩調を合わせるように、旧来の文芸批評の方法が後退した。替わってデコンストラクション、新歴史主義と称される文学理論が舞台に登場し、デリダ、フーコー、ラカン、バルト、グリーンブラットなどの名前が脚光を浴びてくる。これが、研究者として避けがたい現実として認識された。これは単におのれの研究の効率という表層の問題ではなかったのだ。

それぞれの文化から切り離された「抽象的な場でお互いに自律性をもった人間性として、理解しあえる」そんな状況はもはや存在しない。デコンストラクションも、新歴史主義も、自律した人間の存在を否定し、つねに他者の、外部の世界の影響支配に晒されたものとして人間の存在を捉えているからだ。これが現状とすれば、この現在とミルトンはどう交わるのか。「*Paradise Lost* と現代」は、研究者として、教育者として真摯に、この問題に取り組まれた論考であった。

『樂園喪失』のアダムは、一見「自由意志が与えられており、一個の自律

的な主体」のように思えるが、そのじつ、知恵の木にまつわる神の禁止命令に従うことで、「自分の中に他者の命令を … 抱え込」み、ついにはイヴという「他者の支配する領域」も容認する存在なのだ。とすれば、ミルトンのアダムにおいてもすでに自律した人間像、デカルトの言う「我」という普遍的人間像は、崩壊して、現代の文学理論の問題意識に関わってくる。これが現代の視点からよく考え抜かれた論旨だ。けれども、現代に召喚された新たなミルトン像の詳細をもうこれ以上に、先生の端正で緻密な文体に視ることはできなくなった。

明日はまた、新しい森 —— 藤井治彦先生追悼

坂 本 武

藤井治彦先生は、いつも我々の記憶に残るような言葉をたくさん残されていったような気がする。私は直接教場で先生の指導を受ける機会は無かったが、様々な折りに先生に接して話を伺ったりした時には、先生の言葉はその後たびたび思い出してはこちらが反省を促されるような思いがしたものだ。時にはその言葉の激しさにびっくりしたりした。炯眼人を射るという言葉があるが、先生は丁度そんな感じがした。しかし急いで言っておかねばならないが、先生の言葉はあくまでも独善的な偏向からは自由だった。私する心というものを自ら厳しく拒絶しておられた所為であろう。先生を知る人たちは大抵そんな一種清々しい思いを共通に持っておられるのではなからうか。

先生の言葉の中に、自分が英語を本当に読めるようになったのは吉田安雄先生と柴田徹士先生のお二人のおかげだ、というのがあった。言い方はこのとおりではないが、そんな主旨だった。私は勤め先の関西大学で幸いにも吉田先生に親しく指導を受ける幸運を得たので、吉田先生の英語の読み方とい

うものは少しく理解している。それは細部まで徹底した精緻な読み方で、などと言うのもおこがましいほどの、ちょっと凄まじいものだ。それは吉田先生が残された自筆ノートを少しでものぞいてみるとよく分かる。

柴田徹士先生には私は残念ながら直接教えるを受ける機会にはなかったが、その教え子にあたる先輩方の話や、柴田・藤井先生共著の『英語再入門』その他のご著書からみて、藤井先生が柴田先生を自らの師と仰がれた理由も分かる気がする。

吉田先生や柴田先生の世代の方々にとっては、英米へ在外研究に赴くなどということは現在では考えられないほど困難なことであった。吉田先生も阪大を退官されるまでついにその機会を得られなかった。関大へ移られてからも海外へ行かれる機会はなかったように思う。そのような、英国へ一度も行かれなかった吉田先生が、ご専門のヴァージニア・ウルフの伝記的事実の細部をまるで見てきたように再現されるエピソードが、藤井先生による吉田先生追悼の一文に紹介されている。吉田先生が1994年に亡くなられた時、僭越なことながら私が編集をやらせて頂いた追悼文集『桐の花』の中の一文である。その中で藤井先生は吉田先生のお答えに感銘を受けられて「先生、よくご存じですね」と仰られた。その時吉田先生はハッと笑って、「そりゃ、専門家だから」というふうに応じられたという。吉田先生の学問というものをよく伝えている話である。

しかし、その吉田先生も今は亡く、柴田先生も今年5月に逝去されて、にわかに寂寥感が深まっている。藤井先生が柴田先生よりも先に逝ってしまわれたということは、もし身内のこととして言えば「逆縁」ということではないかと、いささか惘然たる思いに駆られるのは私一人だけではあるまい。ことの順序が違うのではないかと。阪大の英文学研究の伝統を担ってこられた先生方が、このように次々と他界されていくのは心細い限りだ。我々はこれをどのように引き継いで行けるであろうか。

ところで、藤井先生夫人房子様から贈られたテレホンカードのことについて

て、私事ながら書いておきたい。私は先生の前夜式に出させて頂いて、ただ悲しみの気持ちを伝える他はなかったのに、奥様はそんな私たちの心を汲んでこのような意義深い贈り物をくださったのである。頭の下がる心遣いである。そのカードには周知の通りミルトンからの引用があった。奥様がどのようにしてこの言葉をカードに選ばれたのか、その事情は知らないが、その訳語が美しかった。「明日はまた、新しい森、新しい牧場へ。」

このカードを頂いた時、私は家内に「いい言葉だねえ」と言って渡しておいた。英文学のエの字も知らない家内に私はこれまで藤井先生のことをあまり詳しく話をしてきた訳ではない。先生のご逝去を悼む気持ちが私と同じである筈はない。ところがしばらくして彼女は、「こんなものを作ったの」と言って、趣味にしている型絵染の作品らしいものを見せに来た。見ると、頂いたカードの詩行をそのまま入れて森のイメージを描いた型絵染が出来ている。相手が身内だから作品をはめるわけにはゆかないが、彼女が「明日はまた、新しい森」の言葉にどこか深い所でとらえられたことに私は何か貴重なものを感じた。そこで、内心不躰なことになりはすまいかとためらいながら、これを奥様に送ってみてはどうかと言ってみた。やがて家内は自分なりに手紙を添えて奥様の元へ送ったようだ。それは一旦は戻って来てしまった。奥様がたしか東欧への旅をなさっておられたからである。しかしその後、奥様の喜びの気持ちの溢れた返事がわが家に届いて、私も何だか安心した。

人生の大きな肯定を歌うようなミルトンの訳詩は、訳語のレベルを越えて藤井先生の遺言となり、それは先生とは無縁の者の心まで擱んだのだ。それは記憶に残る先生の言葉の最後のものとしていかにもふさわしい。

藤井治彦先生を偲ぶ

川 口 能 久

快復されることを願っていたが、退官記念論文集の完成をまたずに、藤井治彦先生が亡くなられた。先生自身もこれほど早い死は予期されていなかったのではないか。残念でならない。

先生が文学部にこられたのは、1975年10月のことである。記憶が定かでないが、演習で最初に使われたテキストが *Paradise Regained*、次に使われたテキストが *Faerie Queene* であつたと思う。わたしはまったく何もわからないまま、ただテキストを読んでいたように思う。あの頃は、先生も、わたしたちも、まだ若かつた。

先生は厳しさと同時に個々の学生にたいする配慮を忘れられなかった。わたしが院生のときであつた。特にお願いしたつもりはなかったのだが、先生がフォースターの研究書を送ってくださった。この研究書には、いろいろな意味で随分助けられた。わたしと同じような経験をもつ人は多いのではないかと思う。

先生がすぐれた学者であられたことについて、わたしがここで多くを語る必要はないであろう。あるとき先生は「いわゆる雑用をこなしつつ、論文を書きつづけるのは至難の業である」という意味のことを言われたが、先生はその至難の業を見事に成し遂げられた。このことについては、退官記念論文集に掲載されるはずの著作目録が何よりも雄弁に物語るであろう。

先生は、しかし、単にすぐれた英文学者であられただけではない。もっと広い意味における教師であり先達であられた。ごく有体に言えば、教師としていかに身を処すべきか、学生にいかに接するべきか、（こういう言い方は

個人的には好まないが、) いかに生きるべきか、そのようなことをわたしは先生から教えていただいたような気がする。

先生は文学研究ばかりでなく人物やさまざまな物事の本質を見抜く眼識をそなえておられた。ひとつだけ例をあげれば、わたしが阪大を去るにあたって、先生は「きみの課題は精神的に強くなることだ」と言われた。まことに本質をついた指摘である。あれからほぼ二十年たってしまったが、わたしはいまだにこの課題をはたせずにいる。

阪大をはなれてからは、先生にお目にかかる機会はほとんどなくなってしまった。年に一度、阪大英文学会でご挨拶をする程度になってしまった。それでも先生が阪大におられるということだけで、何か安心することができた。わたしだけでなく、多くの人が同じように感じていたのではないだろうか。先生はそうのように頼れる存在であった。先生にはそのような存在感があった。

去年の9月だったと思う、わたしは文学部でおこなった授業の報告をかねて、先生にお葉書をさしあげた。阪大英文学会でお会いしたとき、先生はほとんどしゃべられなかったが、身振りをまじえて謝意をあらわそうとされた。そして学会が終わったあと、車椅子のまま介護用タクシーに乗って阪大をあとにされた。それが先生にお会いした最後の機会になってしまったのだが、そのときの先生の姿をわたしは忘れることができない。

先生が亡くなられたあと、奥様からテレホン・カードが送られてきた。そのカードには、「To-morrow to fresh woods, and pastures new. 明日はまた、新しい森、新しい牧場へ。ミルトン『リシダス』、第193行」という言葉がしるされていた。これはわたしの勝手な想像なのだが、この言葉を選ばれたのは、おそらく先生自身であり、この言葉には、これほど早くではないにしても、死を覚悟された先生のあとに残る者へのメッセージがこめられているように思われる。改めてことわるまでもなく、わたしの『リシダス』に関する知識はほぼ皆無である。しかしこの言葉が求めているのは、いつまでも嘆き、悲しむことではない。どのようなことがあっても、希望をもって、

それなりに（これは先生が好まれた言葉のひとつであったと思う）、未来にむかって生きることを求めているように思われる。とすれば、いろいろな意味において、先生に教えていただいたことを糧としつつ、それなりに未来にむかって生きることが、先生の遺志を継ぐことになるのではないか。先生のご冥福をお祈りする。

アルカディア

山 津 かおり

牧人コリン・クラウトという名前を初めて耳にしたのは、阪大大学院に入って、藤井先生のご講義を受けたときであった。コリン・クラウトの住む世界は、「心地よい場所」として、人々があこがれる場所であるが、「アルカディアにも死は在りき」とあるように、死を免れることはできないということを、先生から教わった。

当時、地方から大阪に出てきて、自分探しの只中にあった私は、静かな中にも情熱を込めて話される先生の牧歌世界に強く心ひかれた。私が心をひかれたのは、今思えば、先生のご講義の中には、私の探していた答えが二つ隠されていたからだったのであろう。一つは、「心地よい場所」は、古くから皆が求め続けてきたものであるということ、二つ目は、いくら探しても、死を免れる場所は決してないということである。前ばかり見て自分が打ちこめるものを探していた私の心の底には、漠然とした死への恐怖があったのかも知れない。子供のころ病弱であったので、ある恐れが依然として残っていたのだろう。

先生が言葉で描き出されるコリンの姿のうち、特に心ひかれるのは、いつもどこか不安そうでありながらも、信念をもってあこがれの歌を笛で吹いて

いる姿であった。私はきっと、無意識のうちにコリンに自分を重ね合わせていて、コリンの登場するエドモンド・スペンサーの作品を読めるようになっていたと思うようになったにちがいない。

講義用のテキストはオックスフォード版のエドモンド・スペンサーの作品集で、表紙には「赤い十字の騎士」の絵が描かれていた。表紙を開けると、古いつづりの英語がぎっしりと詰まっていた。私は、見慣れない古いつづりの英語に戸惑っていたものだ。しかし、今日、少しずつではあるが、スペンサーの研究が続けられているのは、先生が語られるコリンの話が特に印象深かったからだと思っている。

オックスフォード版のスペンサーの作品集の中の『牧人の暦』、「一月」に、実際、コリン・クラウトの挿絵がのっているが、先生のご講義が進んでいくにつれて、コリン・クラウトが生き生きと身近かに感じられるように思えてきたのは、私だけであったのだろうか。牧人コリンが主に登場するのは、『牧人の暦』と『コリン・クラウト故郷に帰る』である。この二作品では、コリン・クラウトの愛の対象が変化していくことを知り、コリンとともに、次第に「観想」の世界に入っていくように覚えている。『四つの賛歌』で地上の愛と美、更に、天上の愛と美についての詩に触れ、愛の諸相についても考えるようになっていった。

考え、悩み、詩を歌い上げるコリン・クラウトが、ついには、スペンサーのより完全な分身になるということを知ったのは、スペンサーの大作『妖精の女王』の説明のときであった。この作品は牧歌詩ではなく、エリザベス女王に捧げられた叙事詩であり、牧人は登場しないことになっているが、第六巻、「礼節」の巻には、作者スペンサーの分身の牧歌詩人として、コリン・クラウトが登場し、礼節のもととなる愛と美のとらえ難さを示した後、大切な笛を折ってしまうのである。

コリン・クラウトに対するのに劣らぬ関心を、スペンサー自身に持ち始めたのは、この時からであったことは忘れられない。先生は常々、詩において

は、特に言葉自体を大切に読んでいくようにと言われていた。私の場合、遠回りしてしまったが、やっとこのころから、四百年以上も前の詩人の言葉の重みを少しずつ感じられるようになった。先生はいつも、私たち学生に対して忍耐強かったように思い出される。

先生の忍耐強さと優しさは、迷路のように筋や人物関係の複雑な『妖精の女王』の解説のされ方にも現れていた。少しずつ、丁寧に読んでいけばよいということを示されるがごとく、語法や単語の意味を教え、音読もして下さった。また、ご研究中の構造図を見せて下さったこともあった。それは迷路に迷い、戸惑う誰にとっても、いつも道標となる有り難いものであった。

藤井先生からお教え頂いたことはあまりにも多く、感謝してもしきれない。これからも、「永遠」への旅人コリン・クラウトとともに、エドマンド・スペンサーの作品を読み続けていきたいと思っている。

藤井先生を偲ぶ

服部典之

40年少し人間をやってきた。様々な先生に出会いその中には本当に尊敬できる先生方もいた。しかし、少し古くさい表現を使わせていただくなら、「親分」と呼べる先生は藤井先生ただ一人だったような気がする。

別に水さかずきを交わした記憶はないが、いつからか、何か相談事や頼み事があれば藤井先生の研究室を訪ね、またはお宅を訪ねるようになっていた。そんなとき、必ず先生は身を乗り出してこられて「どないしたんや」と真剣な顔で応えてくださったものだ。

言語文化部にたまたま来られた客員教授がチェリストで、そのコンサート企画を依頼され、言文の教授と力を合わせてプロデュースをした。しかし、

広報活動をどうしたものかと頭を抱えていたとき、ふとそのような悩みを先生にうちあけた。「よっしゃ、まかせとけ。」先生は、すぐさま様々な人脈を動員して、新聞記事に載せるなど大々的なキャンペーンを張ってくださり、コンサートは大盛況に終わった。

教務係の事務ヘッドになった時、押し寄せるトラブルに当時 30 そこそこだった私は神経が参っていた。「本当に嫌になったらやめてやるぐらいの気概をもったほうがいいで。一緒にやめてどっか小さいところでやり直そうや。」もちろん本気でおっしゃったとは思えないが、涙がでるほど嬉しかったことを覚えている。

「よっしゃ、まかせとけ」と言って、ご自分の全存在をかけて、他人を引き受けてくれるよき親分的指導者が、これは私自身の自戒を含めてだが、今日本にどのぐらいいるだろうか。これを言うためには多大な責任をしょいこむ覚悟がいるはずで、そうおいそれとは言えない台詞だ。それを藤井先生は、何度もおっしゃってくださいました。

思えば、20 才そこそこの学生の頃から、つまらない質問をしても、「じゃ、コーヒーでも飲みながら」、と喫茶店でごちそうしてくださりながらいろいろ教えてもらった。その時以来、長い間お世話にばかりなったものだ。「いつもおごってもらってばかりですいません。」「いや、えらくなったらおごってもらわうわ。」この繰り返しだった。

親分・子分というからには、親分への義理を返さなくてはならないはずだが、情けないことにほとんど私は無力だった。震災に遭われたときもお見舞いに行くぐらい、ご病気になられても私にはどうすることもできなかった。回復された時の記念パーティは、在外研究中で参加できなかったし、最後のご入院の時も父親の病気から死に至る時期と不幸にも重なり、ほとんどお会いすることができなかった。お亡くなりになった後、前夜祭で弾いたバイオリンはいくら弾いても弦がゆるんだ（この最後だけはどうも藤井先生のいたずらだったように思えてならない）。

何もお返しはできなかったが、私の子分として唯一誇りを持って言えることは、私は藤井先生を愛していたということである。私は1999年の11月に父を亡くし、12月に藤井先生を亡くした。私は実の父親と育ての父親を一挙に亡くしたのだ。この傷は一生癒えることはないだろう。

私が大学時代、先生がスポンサーの講義で、パストラル・エレジーについての解説されていたときに、「だいたい日本の弔辞と同じで、先生が死んで悲しい悲しいとか適当なこといいながら、結局最後は、それでも先生の死を乗り越えて生きていきます、と続くもんでしょ。それと同じです」とおっしゃっていた。だが、どうも一年近く経っても私は藤井先生の死を乗り越えられていない気がする。

このような情けない文章を書いていると、「何をいつまでそんなこというてるんや。しっかりせなあかんで。おまえももう子分の年じゃなくて親分にならなあかんやないか」という先生の声が聞こえてきた。「先生、そうはおっしゃいますが、やっぱり寂しいですよ。」

藤井先生、どうか安らかに休息下さい。

“不器用な” やさしさ

新 野 緑

藤井先生にはじめてお目にかかったのは、もう二十年以上も前になる。大学三年の夏、六甲山に新築されたセミナーハウスに勉強会の名目で遊ぶ計画をたてた折りに、引率をお願いしたフランス語の先生が、せっかくの機会だから僕の先生にも来ていただいてお話をうかがおうと、藤井先生を招いてくださったのである。

シェイクスピアのソネットについてのその時のお話は、今でもはっきり覚

えている。語句をひとつひとつ丁寧に読み込み、他者の意見と自分のそれとを峻別して示される厳密な読みと、「これは思いつきで確かめねばならないが」と前置きして語られた自由な発想とが不思議に溶け合った魅力的な講義だった。その時、他の人の研究発表を聞いておられた先生が、おそらくは初見のユゴーのその詩に注釈を加えて、見事に意味を立ち上がらせたことも新鮮な驚きだった。詩を読む楽しさをはじめて実感した経験だったと思う。

しかし、学問以上に私の心を捉えたのは、二人の先生の間に垣間見た師弟関係だったかもしれない。英文、仏文と御専門は違ったが、お二人の会話は、互いに対する尊敬と愛情ではのぼのと温かく、少し古風な、明治の小説の一幕を見るような気がしたものだ。

藤井先生は、「教師は学生の人生に立ち入るべきではない」とおっしゃり、教師が学生を囲い込むようなべたべたした関係を嫌われた。その先生の姿勢は、辛辣な言葉で人を遠ざけるように見えて、実はシャイな思いやりに満ちており、それは私たち学生にもひしひしと伝わってきた。数年後阪大の大学院に入学した私に、先輩たちは口を揃えて藤井先生を「こわい先生」と語ったが、その口調には先生の学生であることへの誇りがほの見えて、身のひきしまる思いがしたものだ。ハイアットの『師弟の系譜』を注釈し、漱石の『こころ』を論じ、「教師が弟子を選ぶのではなく、学生が師を選ぶのだ」とおっしゃった先生は、むしろ理想の師弟関係を常に意識し、求めておられたのかも知れない。

学生の時も就職してから、はっきりものをいう癖^{へき}のやまない私は、藤井先生によくたしなめられた。しかし、正面きって叱られたのは、助手時代に一度である。助手の勤務は通常五時までだが、夏休み、特に用事のない時には、「今日はもういいだろう」と少し早めに帰してくださることがあった。そんなことが何度か続いた後、私はそれを見込んで友人と約束をした。間が悪く、その日に限って、四時過ぎに來客があり、もちろん仕事は続けたが、どこか落ちつかない素振りが見えたのだろう、お客様が帰られた後で「君、

今日は何かあるのかね」と尋ねられた。事情を説明するとその時は黙って帰して下さったが、次の出校日に意を決したかのように、「あれからよく考えたがね、仕事に支障がなければ構わないと家内は言うが、やっぱりその約束は早すぎる」とおっしゃった。勤務時間を蔑ろにしたことは問題だが、それを咎められたのではない。人から与えられた厚意に厚かましく慣れてしまうことを戒められたのだ。しかも、わざわざ奥様の御意見という形で逃げ道を残して下さったところに、先生特有の深い配慮があった。

「君、世の中とは公平なものだよ」「人から気持ちよく物を貰うのは存外難しい」「若い人が研究成果を送ってくれるほど気持ちのよいことはない」——藤井先生が折りにふれて語られた言葉だ。研究においても人生においても、真摯で少し不器用な先生の誠実さがよく表れていると思う。先生よりもずっと不器用な私は、色々な事につまづいて、よく先生に議論を挑んだ。どんなに些細なことでも、真剣に向かっていたら、先生は決して茶化すことなくまじめに耳を傾け、正面から受けとめて下さった。そうした折りに与えられた言葉は、短いものであるだけに含蓄深く心にくっきりと刻まれて、今、私の人生の貴重な^{しるべ}標となっている。

最後に病院にお見舞いした時、あと数カ月の命と宣告され、薬の副作用に悩んでおられながら、先生は意外に明るくお元気そうに見えた。しばらくとりとめのない話をした後、ふと、「治る見込みもなく、こんなにしんどい目にあうなら、いっそ早く楽になりたいとも思う。しかし、僕はもう少し生きたいんだ」と漏らされた。「頑張ってください」としか言えない自分に腹が立った。

亡くなられた先生のお顔は、静かな寝息が聞こえそうなほど穏やかで、自然体を好まれた先生が、最後の瞬間にいかに自然に死を受け入れられたかがうかがえた。しかし、あのお言葉を聞いてからわずか五日後の先生の死は、やはりあまりに早すぎたと思われる。

先生への畏敬の念

山 津 さゆり

藤井治彦先生のご尊父は竹友帛雄、号藻風という詩人、英文学者であった。同じように雅号を持った英文学者に、矢野禾積、号峰人や厨川辰夫、号白村がいた。これら三人の人達はすべて上田敏、号柳村の教えを受けた。言うまでもなく、上田敏は『海潮音』で有名である。

藤井治彦先生ご自身も、お若いときに『英語青年』に英文で論文を発表されるなど、優秀なお方であった。

私は大阪大学に入学したとき、すでにこのようなことを知っていた。私は文学部の英文学を専攻して、藤井治彦先生のお教えを受けたいものと思っていた。幸いにして英文学を専攻でき、先生のお教えを受けることができるようになった。先生のご講義や演習は、非常に明解で興味をそそるものであり、私は先生のお言葉を一字一句もらさずにノートに書き留めようとした。しかし先生には畏敬の念を抱いていたにもかかわらず、ご講義に臨むにあたって全神経を集中させていたかどうかを振り返って思ってみると、いつもそうだとは言えなかったように思う。私は申し訳ない気持ちと自分の怠惰を恥じる気持ちで一杯になる。

私は先生からシェイクスピアの作品の演習を受け、自分の卒論にもシェイクスピアの作品を選んだ。論文を書いているうちに、私は自分の関心が人間の墮落、そしてそれからの再生というようなことにあるのではないかと感じるようになっていた。大学院に入って先生からミルトンの *Paradise Lost* の講義と演習を受けるようになって、この作品の中で墮落と再生の問題が最も厳しい形で取り扱われていることに気付いた。私は先生のご専門の一つで

あるミルトンの研究をすることを先生が許して下さるかどうか心配であったが、自由にしてよいと言われ、ひとまずほっとしたが、不安な気持ちの方が大きかった。いきなり *Paradise Lost* の研究に入る準備はまだできていなかったの、私はまず *Samson Agonistes* に取り組むことにした。論文を発表したとき、先生からどのような厳しいお言葉がでるか、私は戦々恐々としていたが、先生から、自分も気が付かなかったような小さな発見もあるというようなお言葉をいただいて、ほっとし、励みとなった記憶がある。幼稚な論文であったのであろうが、お優しい先生は欠点をあげつらうようなことはされなかったのであろう。

和歌山大学の経済学部にて英語教師として就職してから二年目のときに、私はたまたま基礎演習という、一年生向けのガイダンスとしての演習を受け持つことになった。私はほとんど躊躇することなく『英語再入門』をテキストとして使うことに決めた。この本は藤井治彦先生が先生の恩師である、柴田徹士先生との共著という形で出版されていたものであった。この本を熟読すれば英語、英文学の勉強の重要な点はすべて会得できるようになっているのであるが、大学での演習として学生に読ませるだけですすますわけにはいかないので、私独自の資料を作った。その中の二つをここで挙げさせていただく。『マクベス』の有名な台詞の様々な訳（坪内逍遙訳から小田島雄志訳まで）を紹介したり、文修飾の副詞を、それぞれの例文とともに集めてみたりした。文修飾の副詞の中でも“actually”に関しては、先生がよく演習のときに説明して下さっていたので、資料を作るときに思い入れがあったことを記憶している。またこの種の副詞は、柴田先生が『アンカー英和辞典』で本格的に取り上げられたものであった。それにしても私の資料が、せっかくのご高著の値打ちをさげるようなことがなかったことを、今となっては祈るばかりである。藤井先生が亡くなられて数か月後に、柴田先生も亡くなられた。お二人の先生は、『英語再入門』の続編を出そうというお話でもなさっているだろうか。

『英語再入門』は共著であったが、先生お一人で出されたご高著の中に、『「楽園喪失」——思想としての空間』、『イギリス・ルネサンス詩研究』がある。先生のご論文はスケールが大きいが声高ではなく、もの静かで緻密である。これらのご高著を含め、先生の書かれたものを繰り返し読ませていただいて、私の研究の指針とさせていただきたいと思っている。

私には先生のご論文のようなものは、いつまでたっても書けそうにないが、墮落と再生をテーマとして、ミルトンやシェイクスピアの作品の研究を続けていきたいと思っている。

藤井先生の英文学史普通講義

山 田 雄 三

私の手元に変色した3冊の大学ノートがある。1987年4月から1990年1月までの間、私が取り続けた講義メモである。毎週月曜の2時限目に、藤井先生はルグイの『英文学小史』をテキストにして、3年間で完結する英文学史の講義をしておられた。講義では、ルグイの英文学史を先生が初心者にも分かりやすいように噛み砕いて解説してくださるのだが、時折、先生のお話は学者ルグイへの熱っぽい批評や、機知に富んだ雑談へと脱線することもあった。ノートを見る限り、当時の私の手は、文学史上の重要な思潮や概念を書き留めるよりは、そのような脱線を書き写すことの方に熱心だったらしい。かの吉川幸次郎に師事された中国文学のある先生から、吉川教授の講義中にご自身が取られた大学ノート何十冊分のメモを編集して中国文学史の本を出されたという話を伺ったことがある。真似をしようにも私のノートは「大母音推移」だとか「意識の流れ」などといった項目を書き漏らしているのだから使い物にならない。英文学史としては使い物にならなくても、先生

の在りし日の面影を思い出すには、それでも十分だ。以下は、私のノートから抜粋した藤井先生言行録である。

1. スペンサーの『妖精女王』の解釈をめぐる（1987年10月26日の講義から）

「(ルグイのスペンサー観を解説された後で) これは聊か古い学者のスペンサー観だと言わざるをえない。彼の見方だと、アレゴリーは軽視されて、感覚的な表現だけが評価されることになる。今日のスペンサー学者ならそうは言わない。アレゴリーの中の構造や体系といったものにもう少し注意を払って、例えばアーサーが3人物に読めることの複雑さを評価するような議論をするであろう。『妖精女王』の世界が雑然で、その思想が不明瞭だからという理由で、スペンサーが思想のない、むしろ画家のような詩人だと言うのはどうかと思う。」

2. 『楽園喪失』を書くミルトンの意図（1988年9月20日の講義から）

「学者の中には、ミルトンは自らをセイタンに重ね合わせて詩作をしていると考える人もいる。果たして、そうであろうか。セイタンは英雄的に描かれてはいるが、だからと言ってミルトンがセイタンを肯定し、賞賛していると言うには短絡過ぎる。そうではなくて、セイタンの不遜傲慢は否定され、拒絶されるべきものとして描かれている。ミルトンの関心の中心にあるのは、セイタンではなくアダムだと私は考える。(中略) ミルトンの思想の根幹には、恐るべき自我中心主義があって、私など周りにこんな人がいたら決して友人にはしたくないタイプの男である。しかし、詩の芸術性と信仰の喜びを孤高に探求したミルトンは、やはり偉大に違いないのであって、遠巻きにでも見続けたい人間である。」

3. ブレイクの虎（1989年5月15日の講義から）

「フランス革命を経て、人間が悪に目覚めた時期、ブレイクは世界の象徴を虎で表現している。虎とは恐怖であり、悪の存在を目の当たりにさせるものと考えられたわけだ。ブレイクの虎には高度に複雑な象徴性が秘められてい

て、善悪二面の巨大なエネルギーを持っているのである。さて、知っている人も多いだろうが、ブレイクは絵描きでもあった。プリントを見ていただきたい。これがブレイクご本人の描いた虎の絵だが、虎と言うよりはキャンパス内でよく見かける猫に近い。丸い目玉とどこか間の抜けた表情などは、なんとも言えず愛嬌がある。この絵の虎が恐怖の象徴だと言うには聊か無理な感じもする。」

藤井先生の言行録と言うからには、「行」の方にも触れておかねばならぬだろう。英文学史普通講義は必修科目であったので、年度末にはかなり「厳格な」試験が課された。私の記憶に残っている問題は、講義中に読んだ英文学諸作品の抜粋が、一体誰の何という作品からか、また、その作品は文学史上どんな特色を持つか論述せよというものであった。これは、私たちににとっては結構な難問で、『ベオルフ』や『ハムレット』などは中身を読まずとも字体から凡そ判断がつくのだが、19世紀の文芸論になると、その抜粋がアーノルドのものかラスキンのものなのかは、多少は試験勉強をしておかないと見当もつかない。何事にも手を抜かなかった先生らしい出題だが、不真面目な学生には頭の痛い問題となる。試験当日に頭を抱えながら試験問題と格闘中、ふと頭を上げると、先生はいつもとどことなく雰囲気が違う。いつも通りきりっと着こなしたブレザー姿ではあるが、なんとなくリラックスしておられる。そのうち教壇から降りられて、空いていた窓際の学生用の机に腰を掛けられた。試験は2月の極寒の時期と決まっていたが、その日は幸い心地よいほどの小春日和である。先生は、陽だまりの中、学生机に腰を掛け、背中丸めて心地よさそうに足をぶらりぶらりさせておられる。今でもその姿を思い出すたびに、私の連想は自然と、恐ろしくもあり愛嬌もある例のブレイクの虎の絵へと向かうのである。

大学院入試口頭試問

多賀谷 真 吾

ここにひとつの冊子がある。

それは私が大学院入試の際に提出した卒論で、タイトルは『英語詩作品における音象徴の効果』である。英語の詩作品に見られる音の効果を論じたものであった。

自分の書いた卒論など気恥ずかしい、早く忘れてしまいたい。あとからふりかえればそう思うことも多いが、私には忘れられない。

卒論の4ページ目に、ひとつの紙片がはさんである。そして、これこそ藤井先生を偲ぶよすがとなる、思い出の品だからである。

いまから7年前の冬のある日。私はガス・ストーブが静かに燃える阪大の研究室で、大学院入試の口頭試問の順番を待っていた。学外からの受験だったので、かなり緊張していた。

名前を呼ばれて面接室に入ると、英語英文学関係の教員がずらりと並んでいた。もちろん、教員スタッフとは初の対面である。私の緊張は極度に達した。

かくして口頭試問は始まった。大柄で眼鏡をかけた先生が、私に小さな紙片を渡し、それを黙読するように指示した。その眼鏡の奥からは鋭い眼光が私の全身を射抜いていた。渡された紙には英語の詩が数行書かれている。試問の第一関門は、その詩を朗読し、その詩人をあててみよ、ということであった。予想外の成り行きに私の頭が真っ白になったことはいうまでもない。

てっきり卒論や入学の心構えのことを質問されると思っていた私は、こう

聞かれたらこう、ああ尋ねられたらああ、と試問の綿密周到なシミュレーションをすませていた。実力範囲外の質問には、率直に無知を白状するという「奥の手」まで用意していた。それなのに、詩の朗読と作者あてという奇問が私を待ち受けていたのだ。

とにかくゆっくりあせらず音読した。それはとても朗読などという高雅なものではなかった。そして、いよいよ恐ろしい質問だ。

「では君、この詩を書いた詩人はいったい誰かね？」

もちろん即答できるわけがない。もう一度つぶやくように頭の中で詩行を繰り返した。かなりの時間が経過したと思う。そのとき英雄詩体二行連句に気がついた。私は蚊の泣くような声で答えた。

「ボ、ボ、ポーズですか。」

「そうか、わかっているなら結構。」

わかっているのではなく、あたっていたのである。

「それはね、アレクサンダー・ポーズの『批評論』の一節で、君が卒論で引用してただろう、その次の行からの数行だよ。」

やられた！阪大にはなんと意地悪な先生がいるかと思ったが、これこそ藤井先生なのであった。しかし、このやりとりがあってから、少しは和やかな雰囲気です問が進んだように思う。

晴れて大学院に進学していろいろな人に尋ねてみたが、そのような異例の試問はあとにもさきにも聞いたことがない。また、あるとき談話会のあとのお茶の席で、おそろおそろあときの心境を伝えてみたところ、先生はあっさりとおっしゃった。

「いやあ、君が詩の音について興味があるようだから、それならいっちょ朗読させてみようか、ということになってね。」

要するに、異例の試問は先生の優れた思いつきからであった。実は大学院に入ってからわかったのだが、先生もそのころ詩の意味よりもむしろ音声的

側面に興味を抱いておられた。私の卒論テーマは先生の恰好の興味対象となったのかもしれない。

私は今でも、そのときの紙片を卒論の4ページ目に大切にはさんでいる。そして、あの奇妙な試問のことを誇りに思っている。

藤井治彦先生の魅力

川 島 伸 博

私と藤井治彦先生との付き合いは、まだ始まったばかりだった。修論を書き上げた私を、ようやく十七世紀英文学会関西支部へと連れていってくださるようになったところだった。ルネサンス詩の研究者の一人として、私のことを、たとえ青二才としてでも、認めてくださるようになった矢先の、突然の死であった。研究者として、そして人間として、先生から多くのことを吸収しようと勝手に思い込んでいた私にとって、その死は、道程を照らし出す光の消滅の如き衝撃を意味した。短い期間だったけれども、先生の存在は、いつの間にか私の中で大きな位置を占めるようになっていたのだ。

スポンサー研究の大家であられた藤井先生は、文学部の新歓パーティで、文学部は「紳士の育成」の機関であると公言することを憚られなかった。価値観が相対化し、普遍的な人間性信仰が崩れ去った現代に生まれ落ちた私たちの世代にとって、信念に裏打ちされた先生の言葉は、一種滑稽にさえ響くと同時に、羨望をいだかさせる力を持っていた。そして、先生の講義に出席し先生との付き合いが深まるにつれ、その人柄と魅力に次第に引き込まれていくのであった。

私たち若い世代にとっての先生の魅力は、そのたとえ話のうまさにあった。

「君たちの世代の考えていることはわからん」とよく嘆いておられたが、先生の語るたとえば、この世代の壁を乗り越え、いつも私たちの心に深く刻み込まれるのであった。たとえば、英文学者のあるべき姿について語るとき、先生は中島敦の『名人伝』を持ち出し、英文学の達人になるためには、不断の努力を積み、辞書の力に頼ることなくテキストを読めるようになり、最後には「不射の射」ならぬ「不読の読」の境地に至らなければならない、と洪笑を交えつつ、わかりやすく説くのである。自分は熱心なクリスチャンではないとおっしゃっていたが、この寓話（パラブル）の精神は、キリストのそれに通底するものがあったと私は考えている。

先生最後の講義「ミルトン」は、ミルトン学者としての集大成であり、研究者としての先生の魅力が凝縮されていた。ミルトンの人物像、そして彼が生きた時代について概説が終わると、講義は個々の作品の分析へと移っていった。各々の詩について、そのジャンルの歴史、形式の問題、そして内容とその背景とを、限られた時間の中で手際よく、かつおもしろく説明していくその姿は、まさに英文学の「名人」のそれであった。

講義が「リシダス」に及んだとき、芸術において真の情熱の発露は可能かというジョンソン博士の問いを持ち出され、そもそも感情のカタルシスのためには、ある種の「形式」が必要なのだと断言された。文学における形式軽視の傾向にある昨今の批評状況に対し、芸術の形式性を重視される先生の詩観を端的に示すものだった。またその際、このエレジーの形式性と葬式の儀式性との間のアナロジーにふれられたのだが、まさかその半年後に、先生のお葬式が行われるとは露とも思っていなかった。「夏休みが明けたら、『楽園喪失』をやるから楽しみにしておきなさい」とおっしゃっていたが、実現することはなかった。

ただ、今から振り返ると、先生最後の講義には、死を予感させるものが一つあった。誰しもが首肯すると思うが、先生のテキストの朗読は素晴らしいものであった。先生の朗読を聞いて鳥肌が立ったことが何度もある私は、あ

の深く震撼させるような声が、この講義でどのようにミルトンの詩を歌い上げるのかを楽しみにしていた。しかし、先生は、薬の副作用で思うように声が出せなくなっていた。「美声を聞かせることができなくて申し分けない」と微笑みながらおっしゃっていたが、何よりも会話を大事になさる先生にとって、耐え難いことだったにちがいない。見ていて、つらかった。

最初に「光の消滅」と書いたが、先生の功績と思い出が消えてしまったわけではない。それらを糧に、先生が示してくれた名人への道を少しでも邁進していくことが、私たちができる先生への唯一の恩返しだと思う。